

会長就任のご挨拶



一般社団法人軽金属学会
会長 熊井 真次

この度、岡本一郎前会長のあとを受け、令和3・4年度の会長に就任することになりました。責任の重さを痛感しつつ、戸田裕之、山口恵太郎両副会長を始めとする新任役員、学会事務局メンバー各位と力を合わせ、本学会の一層の発展に全力を尽くす所存です。会員の皆様のご支援・ご協力、よろしく申し上げます。

軽金属学会は本年2021年に創立70周年を迎えます。そこで本年度は、「幸せを創る」の合言葉の下、様々な事業を創立70周年記念事業として展開いたします。春秋の講演大会の開催に加え、各種シンポジウム、セミナー、見学会等を開催します。2022年に富山で開催予定のICAA18(The 18th International Conference on Aluminium Alloys)も本記念事業の一部として位置づけ、さらにALMA(Asian Light Metals Association)のMOU調印や、欧州Fraunhoferとの国際ワークショップの開催等、学会の国際化・グローバル化を推進します。参与会等を通じた産学官連携や、軽金属奨学会、日本アルミニウム協会、日本マグネシウム協会、日本チタン協会、軽金属溶接協会等の関連学協会との講演発表やシンポジウムの共催・協賛を積極的に進めます。軽金属学会の顔とも言える会誌「軽金属」の刊行や研究部会報告書の出版に加え、「私の一枚」編集集や70年史等を刊行します。さらに軽金属奨学会のご協力の下、投稿助成制度を開始し、共同刊行誌Materials Transactionsの充実を図ります。14の研究部会では若手研究者の登用、学生委員の参加促進等により、研究活動の活性化を図ります。研究の奨励、研究業績の表彰に関しては、軽金属学会賞、功労賞、功績賞等の既存各賞に加え、本年度は70周年記念学術功績賞や功労賞、維持会員運営功労賞等の選考・表彰を行います。軽金属学会の将来を担う人材育成は最も重要な事業のひとつです。本学会の人材育成・男女共同参画事業に寄与する啓発・普及活動を実施し、中高生・指導教員への働きかけ、若手の会・女性会員の会のさらなる充実を図るとともに、軽金属奨学会と協力し、学生の博士課程進学支援等の高度人材育成事業を展開し、若手会員ならびに女性会員の増強を図ります。各支部では例年の活動に加え、独自の創立70周年記念事業を立案・実施いただけるよう期待しております。

さて、我々新任役員を務めは以上述べたような各種事業を粛々と進めていくことでありますが、終息の目途がつかないコロナ禍の中、本学会の活動も暫くは「ウイズコロナ」、即ち、少なくとも短時間には新型コロナウイルスの撲滅は困難であるという認識を前提として推し進めていかざるを得ません。特に講演大会、シンポジウム、各種会議等大勢の方々が一堂に会するような催しを従来と同じ形式で開催することは困難です。しかし、ここはある意味、発想転換して乗り越えていくしかありません。「幸いにも」昨年オンラインで開催した講演大会では多くの収穫がありました。画像、音声ともに明瞭で、様々な研究発表を興味深く視聴することができました。昨今はオンライン講演大会の運営方法も改善され、他学協会においてもそのメリットが報告されるようになってきました。昨年フランス・グルノーブルで開催予定であったICAA17も完全オンラインで実施されました。従来の現地での対面方式に勝るはずはありませんが、オンライン懇親会も行われるようになってきました。また東京への移動が必要なくなったため、「幸いにも」本学会各種委員会の出席率が向上したという成果もあります。今後オンライン会議に多くの方が慣れ、かつオンラインならではの長所を見出すことができれば、時間や費用の削減をもたらす有意義な会議として定着するものと思われまます。このように今の我々には、「自分の置かれた状況で何かしら光明を見出し、そこで最善を尽くす」ことが必要かと思えます。

さらにこの機会を、やがて訪れる好機に備えて実力を養いながら活躍の機会を待つ、すなわち「雌伏のとき」と捉え、来るべきアフターコロナの世界における学会全体の在り方や今後の方向性について、若い会員とともに本格的な議論を始めることが大事かと思えます。今や2050年のあるべき姿に向けて世界の国々や世界をリードする企業がアクションプランを策定し、その実現に向けてキックオフしています。軽金属学会も創立70周年を迎えるにあたり、来たる2051年の創立100周年に向け、長期的な課題について検討を開始する必要があるのではないのでしょうか。持続可能な開発目標SDGsアクションプラン2021にも含まれる科学技術イノベーション、カーボンニュートラル、デジタルトランスフォーメーション、質の高いインフラ、女性の参画等について「軽金属」という素材が、そして本学会がどのような貢献ができるかについて考えることから始めるのも良いかと思えます。また「最も強い者が生き残るのではなく、最も賢い者が生き残るのでもない。唯一生き残ることができるのは、変化できる者である。」というダーウィンの言葉がありますが、従来軽金属学会の強みだと考えられてきた「世界でも稀有な軽金属に特化した学会」であること、「産と学の会員が半々のバランスのとれた学会」であることが、これからも果たして強みとして活かされるのか、あらためて考える必要があるのではないのでしょうか。

軽金属学会が、会員各位のみならず社会に対し幸せを創る学会として貢献し続けることができるよう、微力ながら全力を尽くし、学生時代より今日に至るまで永くお世話になってきた本学会へ御恩返ししたいと思っています。